

白鳥平 A 遺跡VI層石器群の再評価

装飾古墳館 村崎 孝宏

1. はじめに

令和3年度第16回古墳館・菊文研講座において「文化財保護を振り返る-発掘調査、遺跡から学んだこと-」をテーマに話す機会をいただいた。そこで、これまで筆者が文化財行政に関わった多くの遺跡の中で「城・馬場遺跡第2地点」や「白鳥平 A 遺跡」、「白鳥平 B 遺跡」の発掘調査について振り返る機会を得た。それぞれの遺跡についての調査成果は、既に報告書にまとめ公表している(熊本県教育委員会 1991、1993、1994)。奈良文化財研究所の「全国遺跡総覧」で検索できるので、興味のある方は参照いただきたい。

今回、報告書を読み直し発掘調査成果を改めて振り返ったことで、当時筆者の勉強不足から石器群の理解と評価が十分でなかった点に気づかされた。特に、石材に関する観察や理解が十分でなかった点など気になる点が少なくない。「遺跡」を理解するには出土した石器群から得られる情報を客観的に記録することが必要であり、それが地域研究の重要な基礎資料となる。なかでも「石材」と「技術」は、当時の人びとの行動範囲や遊動領域、集団間の関係性から地域性、文化圏など空間的広がりや時間的変遷を考えるうえで重要である。利用される石材が「どこで採取され」、「どのように利用され」たか、あるいは「どのようにして」、「どのような形で」遺跡に持ち込まれたのか。また、「どのような技術で石器に加工されたのか」、「石器」から読み取れる情報は案外多い。また、遺物の出土状態やまとまり、遺構との関わりなど遺跡から学ぶことはさらに多い。

そこで、今回はかつて筆者の力量不足から、石材に関する観察や理解が十分でなかった点など、今日的視点から遺物を見直し、遺跡から出土した石器群を正しく理解し評価することを目的とする。石材に係る情報を整理することで、行動領域や地域間の交流と関係性等の理解につながることを期待する。

2. 遺跡の概要

1) 遺跡の位置と環境

白鳥平 A 遺跡は1990～1991年に九州縦貫自動車道(人吉ーえびの)建設工事に伴い発掘調査が実施された。遺跡は、人吉市赤池水無町に所在し、球磨川の支流人我胸川の左岸丘陵に立地する。丘陵の基盤層は入戸火砕流(シラス)で、標高 187～189m を測る。該地は、加久藤～大口にかけて三県を画する山地から連なる丘陵で、胸川や人我胸川、鳩胸川によって開析されたそれぞれの谷に挟まれている。遺跡は南方の山地から徐々に低くなりながら連なる丘陵の突端に位置する。東側を流れる人我胸川との比高差は約40mを測り、北側に人吉市街地を望む。遺跡はこの丘陵のほぼ全面に形成される。最高所は遺跡のほぼ中央に位置し、入戸火砕流(シラス)が露出する。この最高所から周囲に向かって緩やかに傾斜するが北及び西側、南西側では谷に

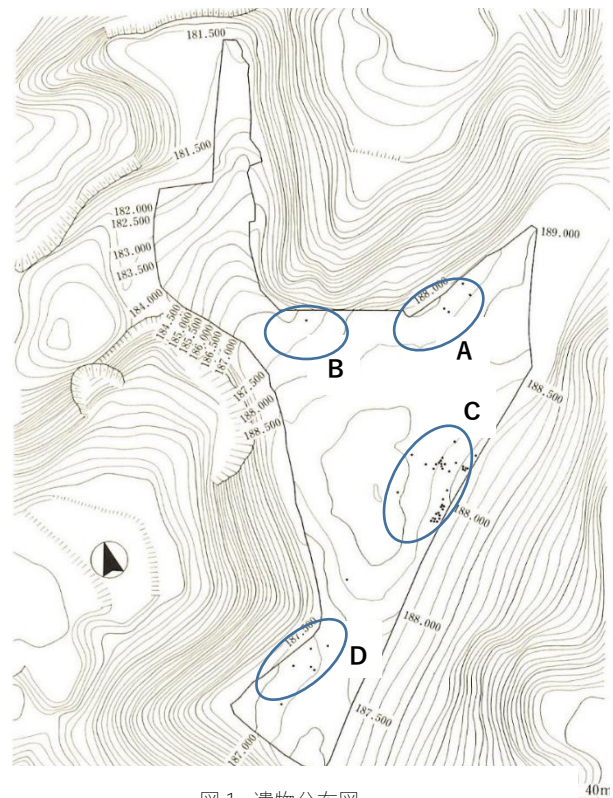


図1 遺物分布図

向かって急峻な崖地形となる(図1)。

2) 層位と包含層

当該遺跡では始良カルデラ起源の入戸火砕流(シラス)をⅦ層として7枚に分層できる(図2)。Ⅲ層には鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰の一次堆積層(b)と二次堆積層(a)が確認される。Ⅳ層は暗褐色土、Ⅴ層は黒褐色土で、上層から下層にいくに従って粘性を帯び締まりが強くなる。また、Ⅴ層中にはガチガチに固まった黒色のブロックを多量に含んでいる。Ⅵ層は褐色土で、基盤層の入戸火砕流(シラス)が土壌化し二次的に堆積した層と考えられる。Ⅶ層は基盤層である入戸火砕流(シラス)で、土色と土質の違いから a, b 層に細分できる。Ⅶa 層は粒子が粗くザラザラとした黄色火山灰である。同様の土層が狸谷遺跡で確認されており、入戸火砕流の二次的堆積層と考えられる。Ⅶb層は灰白色土層で入戸火砕流(シラス)である。このⅦa 層、Ⅶb 層とも無遺物層である。

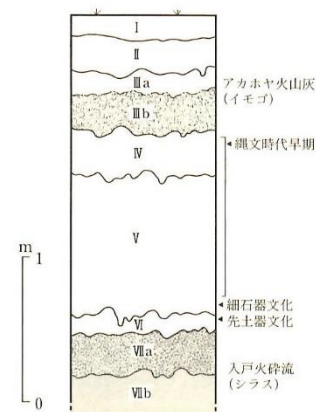


図2 基本土層図

当該遺跡では、Ⅳ～Ⅴ層上半にかけて縄文時代早期の遺構、遺物が検出され、Ⅴ層下半に細石刃石器群が出土する。旧石器時代石器群は AT 層上位のⅥ層を中心に出土し、その総数は70点である。今回は報告書で図示した39点を対象に検討を行なった(表1)。

3) 石器群の分布と組成

石器群の分布は全域に及ぶが、大きくは北東部(A 群)と北側(B 群)、東側緩斜面(C群)、南側の西側緩斜面(D 群)の4つのまとまりに区分できる(図1)。これらの石器群は前述したとおり AT 層上位のⅥ層を中心に出土し、その総数は70点である。

① A 群

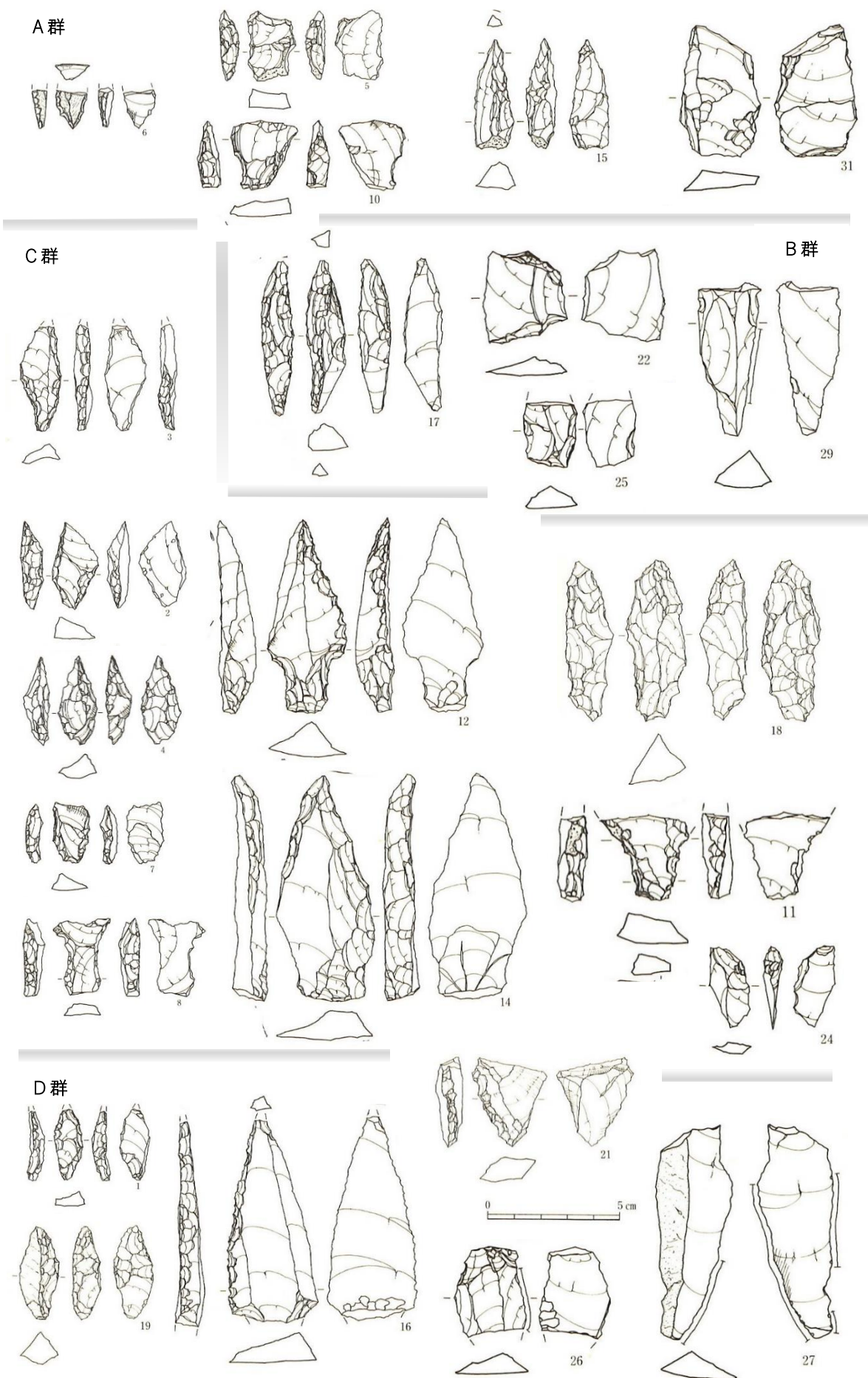
A 群は丘陵北端に所在し、後世の崖崩落等も考えられ完全な組成を示すものではないことが予想される。図示された資料はナイフ形石器1点、台形石器2点、角錐状石器1点と剥片1点である。剥片以外はすべて黒曜石であり、石質及び色調から桑ノ木津留産と黒色で白色粒を夾雑物に含む白浜林道系かもしくは日東系の2種類に分類される。淡灰色を呈する流紋岩は剥片のみで、同群内に製品は見られない。台形石器(10)は、幅広剥片を素材に打面を表面側からの調整剥離によって除去し直線的に作り出し、その面から表面側へ僅かに平坦剥離調整を加える。左側縁基部側の抉入状の調整加工が浅いものの石器製作の作業工程は原の辻型台形石器と同様の技術と判断できる。石材は桑ノ木津留産黒曜石を利用する。

② B 群

B 群は丘陵北側谷部の谷頭に所在し、A 群の西側に位置する。図示された資料はナイフ形石器1点、角錐状石器1点、二次加工ある剥片2点、使用痕ある剥片2点、剥片1点である。ナイフ形石器は、右側縁基部より1回の剥離で抉入状の形状を作り出す外、二次加工は認められない。打面を残置し、表面左側に求心的剥離がみられることから小型の剥片尖頭器の未完成品と考えられる。この資料を除けば残りすべてが非黒曜石で、その内訳は角錐状石器を含む流紋岩2点、サヌカイト2点、安山岩1点、凝灰岩1点である。

③ C 群

C 群は丘陵最高所から東へ緩やかに傾斜する地点に分布する。器種・石材ともボリューム、バリエーションが豊富で、図示された資料はナイフ形石器3点、台形石器2点、剥片尖頭器3点(中原型ナイフ形石器を含む)、角錐状石器1点、二次加工ある剥片2点、剥片・石核各1点ずつである。石材では黒曜石6点(桑ノ木津留産3点、日東系2点、上牛鼻産1点)、流紋岩6点、凝灰岩質安山岩1点である。ナイフ形石器や台形石器、それぞれごとで形態的に共通性は見いだしにくい。



第3図 白鳥平A遺跡A~D群石器群

表1. A～D 群の石材組成

群	計	黒曜石			チャート		安山岩			流紋岩		黒色硬質頁岩
		桑ノ木津留系	日東系	上牛鼻産	黒色～暗灰色	灰白色	サヌカイト質	凝灰岩質	その他	A 類 (暗灰色)	B 類 (灰色)	
A 群	5	2	2			1						
B 群	7		1				2	1	1	1	1	
C 群	13	3	2	1		3	1	1		1	1	
D 群	12				2	2					3	5
その他	2				1					1		
計	39	5	5	1	3	6	3	2	1	3	5	5

表2. A～D 群の石器組成

群	計	ナイフ形石器	台形石器	剥片尖頭器	角錐状石器	掻器	削器	彫器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石核	剥片
A 群	5	1	2		1							1
B 群	7				1				3	2		1
C 群	13	3	2	3	1				2		1	1
D 群	12	1	1	1	1		1			3		4
その他	2							1				1
計	39	5	5	4	4		1	1	5	5	1	8

しかし、桑ノ木津留産黒曜石を用いたナイフ形石器(2)と台形石器(8)は、表面に残された剥離面から求心的な剥離が看取される点で共通する。そこで得られた剥片の形状は幅広もしくは横広の剥片であり、製作される石器の目的剥片のイメージと深くかかわるものと予想される。台形石器(8)は打面を裏面側から除去し、対辺の刃部付近から基部に向けて抉入状の調整加工を施しており、結果的に刃部左右が角状に突起した形状をなす。打面部の調整剥離の方向などいくつかの技術的差異はあるものの大まかには原の辻型台形石器に技術的類縁性が求められる資料であろう。また、ナイフ形石器(4)はやや甲高な剥片を素材として利用することと、裏面側に平坦剥離を多用する点などの技術的特徴を有する。白鳥平 B 遺跡の上牛鼻産黒曜石を用いた小型角錐状石器に類例が認められる。

④ D 群

D 群は丘陵南端に位置し、最高所からの緩傾斜が鞍部で溢れる地点の南側に分布する。器種組成はバリエーションが豊富で、図示された資料は小型のナイフ形石器1点、台形石器1点、剥片尖頭器1点、小型の角錐状石器1点、スクレイパー1点、使用痕ある剥片2点、剥片4点である。石材では流紋岩が6点、黒色硬質頁岩4点、チャート2点で黒曜石を組成しない。

4) 石材利用の在り方

当該遺跡の石材利用では、黒曜石が全体の 57.1%を占める。肉眼観察による分類から夾雑物をほとんど含まず透明感のある飴色をした黒曜石(桑ノ木津留系)、黒色で白色粒の夾雑物を多く含む黒曜石(日東系)、透明感がなく艶のない黒色を呈する黒曜石(上牛鼻産)に大別される。ただし、白色粒の夾雑物を多く含む黒曜石については白浜林道産の可能性もあるが、肉眼観察の限界からここでは日東、五女木、狸々とともに「日東系」とした。

当該遺跡から黒曜石原産地までの距離は桑ノ木津留が約10km、白浜林道が約20km、日東・五女木が約30kmの位置にあり(図4)、最も遠い上牛鼻が約50kmの距離である。

非黒曜石の利用は全体の42.9%を占め、報告書で珪岩としたものは27.1%である。この種の石材については当初、狸谷1石器文化でみられる「表面が白色に風化し、表面に流理構造が認められる石材」と同質と判断し分類を行った。しかし、石質と色調にバリエーションがみられることから、改めて A、B 類に分類を行った(表1)。

A 類は暗灰色を呈し流理構造がみられる。この種の石材は剥片尖頭器(12)と角錐状石器(17)のみに利用される。灰色を呈する B 類は、C 群と D 群にまとまる。黒色硬質頁岩は D 群にのみ確認される。当該石器群の特徴として「臼杵-八代構造帯」沿いにみられるチャートの利用は少ないが、表面が風化して灰白色を呈する石材を含む点は留意が必要で、北中島西原遺跡で類似した石材が出土している。この石材は流紋岩 B 類と同じく C 群と D 群にまとまって出土する。

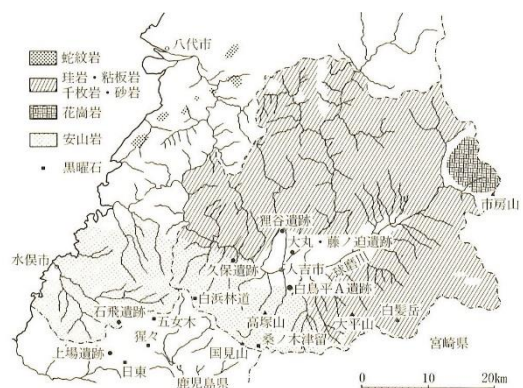


図4 球磨川流域の石材分布

3. 石器群の石材利用と行動領域

先述したとおり白鳥平 A 遺跡の石材利用には、いくつか特筆すべき点が看取される。1つ目は、在地産石材であるチャートの利用が少ない点である。2つ目は、上牛鼻産黒曜石の利用がみられる点である。台形石器1点のみの出土であり製品として搬入された可能性が高い。その他の黒曜石では桑ノ木津留系と日東系が拮抗し、遺跡からおおよそ10～30km圏内にある。つまり、黒曜石の利用にあつては比較的遺跡周辺の石材を選択的に獲得しているといえる。3つ目は、流紋岩の利用が多い点も特徴としてあげられる。この種の石材は色調や石質の違いから大まかに A、B 類に細分が可能である。それぞれの分布は、A 類が B、C 群、B 類が C、D 群にまとまる傾向が看取でき、組成には剥片類も含むことから、遺跡への搬入が製品の上牛鼻産黒曜石の在り方とは異なる。また、当該石器群の石材利用は黒曜石類と流紋岩を含む非黒曜石類が拮抗した様相を呈することが看取できる。黒曜石のうち白色の夾雑物を含む石材については、白浜林道や日東、五女木、猩々が原産地として考えられるが前述したとおり肉眼観察での分類は困難であり、「日東系」として一括した。このことを考慮に入れても一定量の日東、五女木、猩々産黒曜石を含むものと理解でき、上牛鼻産黒曜石の搬入と合わせて南九州方面を行動領域の一端に持つことが予想されよう。また、流紋岩には剥片尖頭器や角錐状石器と剥片類を含んでおり、遺跡への搬入が製品単体でない可能性を示唆するものであろうか。

4. 人吉球磨地域における AT 上位石器群の石材利用と行動領域の推定

白鳥平 A 遺跡でみられた石材のうち上牛鼻産を含めた黒曜石や流紋岩などの利用について人吉球磨地域の遺跡について概観する。今回は、実際に遺物を確認できた遺跡を対象として取り扱った。そのため、遺跡数が限定され情報に偏りが予測されるが、大まかな傾向は示せるものとする。

上牛鼻産黒曜石を含む石器群は白鳥平 B 遺跡と天道ヶ尾遺跡で確認される。特に白鳥平 B 遺跡では黒曜石の65%を上牛鼻産黒曜石が占め、小型のナイフ形石器や台形石器、角錐状石器に利用される。また、この種の小型角錐状石器は天道ヶ尾遺跡第3凹部にも認められる。また、白鳥平 A 遺跡 C 群では比較的厚みのある剥片を素材とした桑の木津留産黒曜石製のナイフ形石器(4)が出土する。この石器は、右側縁に急斜な調整加工を施すことで先端を尖らせ、腹面に平坦剥離を施しており、左上半部に刃部が想定できることからナイフ形石器に分類したが、白鳥平 B 遺跡の上牛鼻産黒曜石製小型角錐状石器と技術的、形態的に類似した特徴を示す。このことは、上牛鼻産黒曜石を多用する集団の持つ技術が在地産石材に置換され製作された可能性を示すものであろうか。白鳥平 B 遺跡石器群は日東、五女木、猩々などの黒曜石原産地を移動経路に取り込み、上牛鼻産黒曜石原産地周辺までを行動領域に持つものと理解される。

当該地域には白鳥平 B 遺跡を除き一定量の流紋岩を組成する鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、石清水遺跡などの遺跡が認められる。天道ヶ尾遺跡では、ナイフ形石器や剥片尖頭器、角錐状石器に用いられ、第3凹部に流紋岩製の打面を残す刃器状剥片を素材に用いた一側縁加工ナイフ形石器が組成している。第1凹部・第2凹部の中間に同様の剥片を素材とするナイフ形石器が報告されているが、調整加工が左側縁部基部より鋸歯状に施され、左側縁上部に想定される刃部角が55～60度と急斜であることからナイフ形石器ではなく削器に分類することが妥当であろう。石清水遺跡でみられる刃器状剥片を用いた特徴的な「石清水型削器」と素材剥片の形状や扱い、調整加工の在り方など技術的形態的特徴が類似する。この種の石器は宮ヶ迫遺跡(鹿児島県)において「縦長剥片の縁辺に鋸歯状の剥離を施す」特徴的な削器として型式設定され(桑波田 2000)、宮崎県内に類例がみられることが指摘されている(桑波田 2004)。このような遺物の分布は、南九州～東九州と当該地域との関係性を示すものであろう。

また、この石清水型削器は、石清水遺跡や宮ヶ迫遺跡で確認されたように剥片尖頭器石器群との結びつきが強

表3. 人吉球磨地域のAT上位の旧石器時代遺跡石器・石材組成表

遺跡	計	黒曜石					チャート			安山岩				流紋岩			黒色 頁岩
		桑ノ木 津留系	日東系	上牛鼻産	その他	計	青灰～ 黒灰色	淡灰色	計	サスカ イト質	凝灰 岩質	その他	計	A類 (暗灰色)	B類 (灰色)	計	
鼓ヶ峰	41	2	1	0	1	4	24	0	24				0	2	2	4	2
白鳥平B	47	2	3	13	2	20	20		20	2	1	2	5			0	2
天道ヶ尾	第1凹部	31	9	1	2	12	9	1	10		1	1	2		2	3	5
	第2凹部	9	1			1	6		6				0			0	2
	第3凹部	15			1	1	11	1	12		1		1			1	1
	第4ブロック	28	2	3		5	19		19				0	1	1	2	2
	第1,2凹部の 中間	8				0	2		2		2		2		2	2	2
石清水	192	2	1			3	135	24	159		4	2	6	13	4	17	7

く、同様の剥片剥離技術システムにより生産され、打面を残したまま利用する素材扱いも共通する。石清水型削器を伴う天道ヶ尾遺跡第1凹部、第2凹部の中間の剥片尖頭器は、打面と石器主軸が直行せずやや斜めにズレるものが多く、求心的に剥離された素材剥片も幅広の形状を示す。中には茎部の作り出しが不明瞭な所謂「中原型ナイフ形石器」に分類可能なものも含まれる。宮ヶ迫遺跡の剥片尖頭器は器長に比べて幅広の剥片素材を用いたものや、打面と石器主軸が直行せずやや斜めにズレるものがみられる。石清水遺跡では凝灰岩質安山岩を用い、表面がザラザラし稜が潰れた特徴を示しており茎部の作り出しは弱い。石清水型削器が在地のチャートを用いた剥片生産を行っている点から凝灰岩質安山岩製の剥片尖頭器は搬入品であると考えられる。

鼓ヶ峰遺跡の中原型ナイフ形石器は、緑川流域でみられる緑色チャートが用いられ、製品として搬入されたものである可能性が高い。このように特定の地域でみられる特徴的な石材の利用は、当時の遊動領域、移動のルートを考えるうえで重要である。川辺川流域の野々脇遺跡でナイフ形石器が出土し、未報告であるが標高約970mの九州脊梁山地に立地する五木村の平沢津遺跡では流紋岩を多用する石器群が検出されており、確認されている遺跡は少ないものの川辺川を遡り人吉球磨地域から緑川流域や阿蘇南外輪、東九州へ移動するルートが存在する可能性が指摘できようか。また、このことは縄文時代早期初頭においても頭地田口A遺跡で前平式土器岩本タイプが出土することから、五木谷を経由した南九州方面へのルートが存在している点を示す事例として興味深い。

5 石器群の時間的位置付け

白鳥平A遺跡について人吉球磨地域の遺跡との比較から当該石器群の時間的位置づけを検討したい。

九州における旧石器時代石器群の編年研究では、AT上位のナイフ形石器群をⅢ、Ⅳ期とし、剥片尖頭器や角錐状石器を組成する段階をⅢ期に位置付け、さらに、当該期を初頭、前半、後半の3時期に細分する(木崎 1988、1994)。木崎氏は人吉球磨地域のAT上位石器群についてⅢ期前半に狸谷Ⅱ石器文化、大丸藤ノ迫石器文化、天道ヶ尾石器文化、石清水石器文化を、後半に鼓ヶ峰石器文化を位置付ける(木崎 前掲)。ここで前半と後半を画するものとして剥片尖頭器の有無をあげている。確かに、当該期石器群はナイフ形石器や台形石器、剥片尖頭器、角錐状石器に搔・削器など豊富な器種組成を示すことが知られ、また、ナイフ形石器の形態組成も基部加工や斜軸形、切出型、打面を残す二側縁加工など多様である。

Ⅲ期前半初頭に位置付けられる狸谷型ナイフ形石器を出土した駒方津室迫では、搔・削器を伴う単純な石器組成を示すことが報告され(大野町教委 1992)、また、同様の石器群が仁田尾遺跡でも確認されている(鹿児島県立

表4. 人吉球磨地域の旧石器時代遺跡の石器組成

遺跡名	剥片 尖頭器	ナイフ形石器						台形(様)石器			角錐状 石器	搔・削器	彫器	石錐	楔形 石器	磨石 敲石
		狸谷型	今峠型	国府型	二側縁加工	基部加工	その他	原の辻型	百花台型	その他						
石清水遺跡	○				○		○					○				
鼓ヶ峰遺跡	○	○?		○			○	○?			○	○				
天道ヶ尾遺跡	第1凹部	○			○?					○	○					○
	第2凹部										○					○
	第3凹部	○			○		○				○	○				
	第4ブロック						○				○					○
	第1凹部と 第2凹部の 中間	○					○					○				○
	集中部外		○													
白鳥平A遺跡	A群						○	○		○	○					
	B群									○?	○					
	C群	○			○					○	○					
	D群	○					○				○	○				
	集中部外												○			
白鳥平B遺跡	北①						○		○?	○	○	○				
	北②					○	○							○		○
	南						○				○					○
	集中部外	○						○?								
大丸・藤ノ迫遺跡	○						○	○		○	○	○	○			○
狸谷遺跡Ⅱ石器文化	○	○					○	○		○	○	○	○		○	○

埋蔵文化財センター 2008)。宮田栄二氏は、南九州での事例をもとに剥片尖頭器石器群以前と以後について整理を行なった(宮田 2006)。狸谷型ナイフ形石器を主体とする箕作遺跡(鹿児島県)や牧内第1遺跡(宮崎県)では剥片尖頭器や角錐状石器を伴わないことが示された(宮田 2006)。このことを参考に人吉球磨地域の当該期石器群を改めて俯瞰すると、角錐状石器を伴わない天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群や石清水遺跡 A～C ブロックといった石器群が確認できる。これとは逆に剥片尖頭器を伴わない石器群として天道ヶ尾遺跡第4ブロック、白鳥平 B 遺跡北①石器群が認められる。白鳥平 B 遺跡北①石器群の角錐状石器は小型のみで占められ大型のものは組成しない。このことを時期差と考えれば天道ヶ尾遺跡第4ブロック石器群より後続する石器群と理解できよう。当該地域のⅢ期石器群を整理すれば、狸谷型ナイフ形石器を単純組成する段階→(X)→天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群、石清水遺跡 A～C ブロック→天道ヶ尾遺跡第4ブロック石器群→白鳥平 B 遺跡北①石器群となる。鼓ヶ峰遺跡Ⅸ層石器群は示された遺物分布によれば角錐状石器は集中部から大きく外れた場所から出土していることがわかる。切出型、中原型のナイフ形石器、台形石器と搔・削器といった比較的単純な石器組成を示すことが理解でき、天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群や石清水遺跡 A～C ブロック石器群と近い時間的位置づけが可能であろう。白鳥平 A 遺跡をどのように評価するかという点について私見を記しておく。当該石器群は前述したとおり A～D 群の4つの集中部が確認され、利用される石材から A、C 群と B 群、D 群に大きくまとめられる。遺物分布が図示されている C 群では、中原型ナイフ形石器と角錐状石器が集中部から離れた場所から出土しており C 群の石器群に含まれない可能性が考えられる。この点が妥当性を持つとするならば原の辻型台形石器を組成する A 群とその技術的類似性がみられる C 群は、天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群、石清水遺跡 A～C ブロック石器群に先行する(X)に位置付けられるものとする。

6. おわりに

日本における旧石器時代研究の幕を開いた相沢忠洋氏は『「岩宿」の発見-幻の旧石器を求めて-』(講談社文庫)の中で遺跡探求の目指すところを「心の夢としての祖先の生活の遺跡の追究、一家団らんへの思慕」と語る。考古学、発掘調査で得られる資料、情報には土器や石器など腐らずに残されたモノや大地に刻まれた遺構に限られる。この

数少ない情報の中から遺跡を残した人々の生活や当時の社会を復元する。考古学とは何とも壮大なロマンである。

ここで改めて検討を試みた白鳥平 A 遺跡は、九州縦貫道人吉-えびの間建設に伴う事前調査によって得られた資料群である。開発によって消えてしまう前に発掘調査を行うことで記録保存を行った。既に、遺跡そのものは高速道路の開通により今はない。椎名慎太郎氏は『遺跡保存を考える』(岩波新書)で、「この緊急調査のなかには、(略)かなり粗略なものがあり、本来そこから得られるべき情報量のごく一部しか後世に遺せない(略)。いわば、現代人はこうした研究上の「資源」さえ、はなはだしく浪費している」と指摘する。実に耳の痛い言葉である。

しかし、記録保存することだけが目的ではない。そこから得られる情報を整理し、地域の歴史を明らかにしていくことが大事である。そのためには、発掘調査が遺跡を理解するための基礎的作業であることを再認識しなければならない。報告書はその記録の公表であり、遺跡を通じた地域研究の出発点である。発掘調査を担当した者として遺跡を遺した人々の生活、活動の痕跡を再検討し、改めて当該期の石器群を再評価し、地域史研究の一助になればと考える。最後に、本稿をまとめるにあたりご教示をいただいた多くの方々、そして挿図の作成にあたりトレースからレイアウトまでご協力いただいた築出直美、唐木ひとみ両氏と掲載の機会を与えていただいた坂口圭太郎氏に末筆ながら感謝の意を表します。

【参考文献】

- 桑波田武志 2004 「石清水型削器小考」『縄文の森から』第2号
- 宮田栄二 2006 「剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について -南九州における最新の調査成果から-」『縄文の森から』第4号
- 綿貫俊一 2006 「AT 降灰以後の旧石器時代石器群 -東北九州と周辺地域の変遷および関係について-」『九州旧石器』第10号
- 岩谷史記 1998 「狸谷遺跡V層石器群における特徴的なナイフ形石器について -狸谷型ナイフ形石器の研究(1)-」『肥後考古』第11号
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』37 旧石器文化談話会
- 木崎康弘 1994 「剥片尖頭器と石器文化について」『九州旧石器時代関係資料集成Ⅲ 剥片尖頭器』九州旧石器文化研究会
- 橘 昌信 1990 「AT(始良 Tn 火山灰)上位のナイフ形石器文化」『史学論叢』21 別府大学
- 木崎康弘 2003 「後期旧石器時代の変遷と剥片尖頭器の評」『旧石器研究 40 年紀年 旧石器人の生活と遺跡』
- 越智睦和 2006 「今峠型ナイフ形石器の編年的考察 -東九州を中心として-」『九州旧石器』第10号 九州旧石器文化研究会
- 岸田裕一 2006 「宮崎県におけるナイフ形石器終末前夜の様相 -北牛牧第5遺跡第Ⅱ文化層の検討-」『九州旧石器』第10号
- 萩 幸二 2009 「いわゆる〈狸谷型ナイフ形石器〉の意義づけ」『九州旧石器』第13号 九州旧石器文化研究会
- 萩 幸二 2011 「狸谷型ナイフ形石器に関する考察」『九州旧石器』第14号 九州旧石器文化研究会
- 熊本県教育委員会 1990 『天道ヶ尾遺跡(Ⅱ)』熊本県文化財調査報告第111集
- 熊本県教育委員会 1988 『鼓ヶ峰遺跡』熊本県文化財調査報告第96集
- 熊本県教育委員会 1994 『白鳥平B遺跡』熊本県文化財調査報告第142集
- 熊本県教育委員会 1993 『白鳥平A遺跡』熊本県文化財調査報告第127集
- 人吉市教育委員会 1995 『上ノ寺遺跡群』『石清水遺跡』人吉市文化財調査報告
- 熊本県教育委員会 1987 『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告第90集
- 熊本県教育委員会 2002 『頭地田口A遺跡』熊本県文化財調査報告第206集
- 熊本県教育委員会 2016 『北中島西原遺跡』熊本県文化財調査報告第319集
- 五木村教育委員会 1995 『野々脇遺跡』五木村文化財調査報告第1集
- 松元町教育委員会 2000 『宮ヶ迫遺跡』松元町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『仁田尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(128)
- 椎名慎太郎 1994 『遺跡保存を考える』(岩波新書) 岩波書店